

故良知力教授を偲ぶ

都 築 忠 七

(1) 故良知力教授を偲ぶ

一年前の今頃、築地のガン病棟に良知君を見舞ったことがある。病床に起き上がった彼は、いつものほにかむような笑顔をはころばせ、時間が永遠につづくかのよう
に、静かに、ごく日常的な話し、たとえば東京で買える
ドイツ・パンのことなどに打ち興じた。リンパ腺のコバ
ルト照射をうけていること、肺にも小さな怪しげなもの
が広がったことなど、穏やかな目元が少しもこわばる様
子もなく、まるで医者が患者に語りかけるように話して
くれた。それよりまえ、飯田橋近くの病院にいた頃、ガ
ンのことは彼も（と思う）僕もまだ知らされていなかっ
たときだったが、手術のあと枯木のように細くなった彼
に、人生の有限な時間を克服するものは仕事しかない、
というような残酷なことをいった記憶がある。彼のいつ

もの笑顔は変わらなかった。

彼は周知の寡黙の人である。良知ゼミごっこというの
があるという。先生もゼミテンも誰ひとり発言せず、一
〇分も二〇分も黙りこくりに、それから先生がおもむろに
語り始めるのをゼミテンが待つことだそう。まるでレ
ナード・ウルフの描くマクタガートかG・E・ムーアの
ようだ。深い思索とさらに深い感情の人にふさわしい。
他方、彼の書き物は、雄弁とか、ましてや饒舌のたぐい
ではもちろんないが、流麗で、滞ることを知らず、書物
の中の語り手としては超一流の存在だった。

彼の晩年の闘病記や『青きドナウの乱痴気』は、読み
物としても素晴らしい。しかし私が好きなのは、「夢を
追うこと」という短い文章である。小学校時代、校庭に

枝を広げた大きな桜の木の思い出である。その桜の木が「子供の入学時には学校中を桜色のイメージで染めだし、暑いときには大きな木蔭のなかに遊び疲れた子供たちを包みこんでくれたし、そして秋には病葉が校庭一杯に散って子供の心にも生命の無常を教えてくれた。子供たちはやがて巣立っていくし、先生たちはいずれ学校を去っていくのですが、桜の木の四季の循環は変わりません。ぼくも五十の坂を越えましたが（一九八四年の作品だから正確にはまだ坂にさしかかったところだ）、あの古ぼけた木造校舎と桜の巨木はいまもぼくの心のなかに生きています。いま思うと、あの桜の木に教育そのものが象徴されていたようです。」桜の木は教育だけでなく人生のすべてを写し出す。「桜色のイメージ」だけでなく、桜の木の全体を背負いこんで「体中で夢を追うこと」——これが彼のいいたかったことである。

市民的日常性と生命の無常へのこだわり、夢を追うこと、それにもうひとつ、負けじ魂、これらが良知君の穏やかな澄んだ笑顔を説明するようだ。その負けじ魂を、彼自身は、エリート学者にたいする「民衆」出身「学者」の「ひがみ根性」と表現するようだが、私自身は彼のル

ーツをよくは知らないで、ことの是非を議論する立場にはない。大学の採用人事について書くことは御法度かもしれないが、あえて禁をおかしていえば、良知君の『ドイツ社会思想史研究』を主な材料にして検討が行なわれたとき、例によって横紙を裂くことで有名なある教授から異論が出され、その異論が少くとも形式的には大真面目に議論されたことがある。良知君は私にいった——「一橋には僕の学問を理解できる、人はひとりもない、と。」「良知さんは、頭を下げてもお尻は上がっている」（恐らくもっと上品な言い回しだったと思うが）と、大塚秀子夫人が語られたことがある。負けじ魂は、同じく「民衆」出身を自負される大塚金之助先生の前で遺憾なく発揮されたようである。

* * *

大塚ゼミナル時代の良知君を語るには、同期生の高橋亮洋氏、高木典一郎氏、小島節郎氏、佐藤共子さん、あるいは一年下の津田内匠氏の方が、私よりもはるかに適任であろう。色褪せた古いアルバムをみると、一九五〇年三月、多分私の同期生の卒業式のあとだと思うが、佐藤さんの観音寺の正面の石段で、大塚夫妻を中心にゼ

ミテンが並んだとき、最後列のまん中で、冥想にふける僧侶然と写っているのが、当時学部一年の良知君らしい。一九五一年四月、学部新入生のゼミ参加がきまり、図書館まへの石畳に全員整列したとき、中央に立たれた大塚先生の肩越しにやっと顔を覗かせているのも良知君である。一九五一年五月、相模川上流で大塚先生が蛇といっしょに泳いだことで有名なゼミの遠足のときの、古ぼけた写真が残っているが、彼の顔は定かでない。大塚先生と蛇との競泳のことは彼もよく記憶していたから、シャッターを押したのが彼だったかもしれない。

大塚ゼミは、社会思想史(当時の旧制商大では経済学史)のゼミである。良知君は、「彼の時代をひたむきに生き」た大塚先生の「生涯そのもの」が先生の「主要著作」だったという。また「私の両親はプロレタリア出身」という大塚の言葉がとくに好きだったようである。(大塚の社会的ルーツはもっと複雑なものだった、と私は思う。)そして先生の主著をあげるなら『解放思想史の人々、国際ファシズムのもとの追想、一九三五―四〇年』(一九四九年)だというのが、その通りだろう。大塚の「一国の一市民としての生存も許されず、それかといって一世

界市民となることもできなかった、無力な一読書生の小さな人生メモ」に脈打つ魅力と迫力とから、良知君自身終生自らを解き放つことはできなかった。その「小さな人生メモ」には、人類解放の大道が示されていた――曰く「ひろく、人種的・民族的・政治的・警察的・宗教的・性的・社会的・階級的な圧迫、迫害、無知、偏見および迷信からの解放」である。ただ解放の世紀の夜明けを信じ、解放の記念碑の碑文を書きつづった大塚の社会思想史については、彼は多くを語らない。

大塚の社会思想史は、ディルタイ流の精神史でも、ラヴジョイ風の理念史でもない、彼独自のものである。

「人類解放の長い、苦難な歴史に何らかのつながりをもつ人々」を「追想」するもので、伝記的要素を多分に含み、その点ではドイツ的であるよりもイギリス的である。サブ・ゼミのテキストも、私のときがフランクリンの「自叙伝」、次の年がJ・S・ミルの「自叙伝」だった。ただし良知君のときのテキストは、ミルの『経済学原理』だったそう。ミルの『原理』の第一版は一八四八年に出しており、このテキストの選定は、良知君ののちの関心の動向と無関係ではないように思われる。

* * *

ところで一九三〇年代中頃から一九六〇年代中頃までの三〇年間は、思想史・社会思想史の黄金時代だった、といつてよいかもしれない。対立するイデオロギーの血みどろの闘争の時代、巨大な犠牲を払って「文明」が「野蛮」に勝利し、進歩の大道が再確認されたように思われた時代（わが国では戦後の啓蒙期）、そして戦後西欧の物質的繁栄が資本主義と社会民主主義との妥協によって永遠につづくかにみえた時代——これが思想史黄金時代の歴史的背景であり、それが五〇年代六〇年代に、思想史のニュー・スクールを生み出す。（これは、最近の一橋国際交流セミナーで聞きかじったことで、「インテレクチュアル・ヒストリ」を「われわれの創造物」と呼ぶ講師のスチュアート・ヒューズ教授によれば、思想史は多分にドイツ・アメリカ的であり、ニュー・スクールには、フランク・マニユエル、ピーター・ゲイ、カール・ショースケ、それにヒューズ自身らが含まれる。）大塚の社会思想史は、この黄金時代のごく初期のもの、もちろん資本主義と社会主義の歴史的妥協の時期のニュー・スクールのはるか以前のものであって、戦時体制下

に著者がうけた心の傷の疼きがじかに伝わってくる。

「私は今日（一九四八年十二月）、世界においても、日本においても、国際ファシズムの重圧のもとにたおれた学問上の無名戦士のかくれた労作や、国際ファシズムぎせい者のなまなましい時代記録や、血みどろのくるしみをくるしんだ戦争ぎせい者の人間記録がつつぎと公表されているとき、私がこのようなまずしい小冊子しか公刊できないことを、心からはずかしく思っている」と書いた大塚の言葉に偽りは無い。治安維持法に触れたことで十三年間大学から追放されたことが、学者大塚にとっていかに致命的であったか、折にふれて先生の口から、無念の言葉を聞いたことがある。

* * *

良知君が学問生活を始めたのは、欧米の繁栄とは対照的に敗戦後の日本が貧困と屈辱のどん底で足掻いていた頃である。横浜でのアルバイトの帰り道、日本人の女性を連れたアメリカ兵に「ある種の憎しみ」を感じたという。その後の良知君の思想の内面的な展開について私は多くを知らない。この欧米の繁栄と日本の貧困の時代の大半を、私自身、欧米に留学して過ごしたためかも

しれない。(もつともそれよりまえ、新宿の和田組マーケットのあたりでカストリ焼酎をあおったことでは良知君とたいして変わらない。)

スチュアート・ヒューズが「アカデミック・リヴォリュション」と呼ぶ世界的な規模での大学闘争(学園紛争)は、やがて社会思想史にたいする関心に不吉な影をおとすことになるのだが、その「革命」の波の余波がさざ波となってわが一橋にも押しよせた頃、良知君は法政大から母校に戻ってきた。帰ってきて発表した最初の労作は、ユルゲン・クチンスキーの『労働者階級の成立』の翻訳(一九七〇年)である。彼の解説「労働者階級への共感をつらぬく方法」を読むと、のちに「社会史」的と彼がもてはやされるようになったときの彼の対象への接近方法が、明確に、自覚的に示されているのがわかる。それは、近代プロレタリア階級形成史の「現代的意味」を問うものである。産業革命前の手工業職人や農民から賤民にいたるまで、あらゆる階級から出た「屑」が、ここでは工場労働者の素材として位置付けられるにとどまるが、それでも良知君は、アイルランド人を「イギリスのニグロ」とみるクチンスキーに共鳴し、労働者階級形

成史をロシアからインドまで各国別にとらえて発展の特殊性を重視するクチンスキーの手法に感銘を受けたようである。(ところで良知君のインド旅行の計画はどうなったのだろうか。)とくにクチンスキーの労働者階級「状態史」は、福祉政策によって解消したかにみえる資本主義の下での労働者の絶対的窮乏化傾向の実在を証明するのに、窮工化の指標を多面的、複合的かつ長期的にとらえることを教える。たとえば良知君の注目するクチンスキーの「帝国賃金」概念はとくに興味深い。「イギリス帝国主義のもとではイギリス人労働者には超過利潤が多少なりとも配分されているのだから、したがってここでの実質賃金のもつ意味をつかみとるためには、植民地労働者をふくめたイギリスの全労働者、あるいはイギリス資本に雇傭されている全労働者の平均賃金が算出されねばならない。そうすれば、一九世紀全体をとおして絶対的な生活水準は悪化したことがあきらかになるだろう。」資本がグローバルに組織され連結した今日、南アの鉱山で働く黒人やエチオピアの流浪の民までをふくめた「全地球労働者」の実質賃金また実質平均賃金を問うべきだといったら、もちろん良知君は、両手をあげて

(というより目を細めて) 賛成するはずである。クチンスキーは、労働者階級内部の格差や差別を多面的に描いた一方、良知君の言葉によると「歴史を生産力のたえざる発展にもとづく前向きの歩みとして、……巨人の歩みとしてつかもうとする。そのかぎり、それはひとつの進歩史観であるといえる。」

* * *

ところで、例のアカデミック・リヴオリューションが左翼の進歩史観を地にひきずりおろした。しかし進歩史観にたいする挑戦はさらに古く、その震源地はウィーンにあった。ベームリバヴェルク、フォン・ミーゼス、ハイエク、カール・ポパーらオーストリア学派によるマルクス経済学、社会主義計画経済論、唯物史観ないし歴史決定論にたいする批判は、もはや古典的でさえある。これは、かつて世界の十字路として東西南北の異文化が相接し、相対的な思考様式になじみやすく、個人の意識の社会的連鎖とその限界に敏感なウィーンのエリートの知的伝統に負うものであらう。彼らの多くは部分的改良主義にとどまるか、自由放任の仮面をかむる赤裸々な反動になるかのいずれかだった。もちろんこの学派はカー

ル・メンガーにさかのぼるが、メンガーは良知の關係は、何となく知性の弁証法的発展を暗示するようだ。良知君は、そのウィーンに留学し、ウィーンは、彼の思考を育む土壌となった。

たしかに西欧の進歩思想は、一九六〇年代の繁栄で頂点に達し、そのあと、そのかけりの中で、進歩の思想史も、そして解放の思想史までも急速に精彩を失いはじめた。これは五〇年代以来の世界史的諸事件の思想史にたいするインパクトを反映していた——スターリン批判、スエズ出兵、ハンガリー動乱、ブラハの春、キューバ革命、ヴェトナム戦争、中東戦争とエネルギー危機、世界各地の内戦につきまとう冷戦の影と核戦争の脅威。ここでは、このような大状況から一応はなれて、良知君の周辺を見て行きたい。

* * *

私がエリノア・マルクス伝をまとめたのは一九六七年、ヨーロッパ繁栄の良き時代の最後の頃だった。良知君は、これを英文で読んでくれて、僕も同じようなことをしている——僕も今に頭の固い連中に嫌われるよ——と私に語ったことがある。私はマルクスの家族の秘密を「暴

「露」し(マルクスの息子のことは、すでに一部のマルクス主義者のあいだでは知られていたが、幸いにも私は、彼の出生証明書や彼に関する手紙類を探し出すことができた)、ある意味でマルクスを地に引きずりおろした。もちろん地にひきずりおろすことは、人間マルクスを見直すことである。私が伝記の世界に惑溺していたのにたいし、良知君は、マルクスの思想そのものを運動史の中に相対化しようとした。『マルクスと批判者群像』(一九七一年)がそれであり、マルクス、エンゲルス中心だった従来の研究にたいし、ワイトリング、ヘス、シャッパールの「Rettung」救出をこころみた。(私がマルクスの息子フレディに救出の手をさしのべたのと同じように。)

Rettung——これはまさに、「いわゆる流行の」ではない西欧の社会史の主要テーマである。その社会史は、日本ではアカデミズムのなかに定着することのなかったアカデミック・リヴオリューションの過程で生まれた。そのテーマは、いうまでもなく、歴史の中の敗者・弱者の復活・救出である。そのような弱者の典型である日本の百姓の一揆の歴史をまとめたビックス氏は、社会史にた

いるE・P・トムスの影響を重視する。トムスは、ハンガリー事件に抗議してイギリス共産党を離れたニュー・レフトの始祖であり、今では反核運動の世界的リーダーである。彼の名著『イギリス労働者階級の形成』(一九六三年)の第一章のタイトル、「メンバーズ・アンリミテッド」の含意は象徴的である。本書で彼は、民衆の文化を広く深く掘り下げ、階級意識の成立史を描く。プリミティヴ・レベルズ(原始的反抗者たち)を近代的労働の前史においたホブズボームは、クチンスキーとも多くの共通点をもつが、トムスンも、民衆と同時に階級の視野を見失わない点で彼らと同じマルクス主義の歴史家である。

ところで社会史は、多分にトムスンに触発されて研究が進むが、「大学闘争」の時期をへてトムスンのもつ階級の枠をのりこえる、ないし取り払おうとする傾向が目立つようになる。「民衆の歴史」は「下からの歴史」であって、民衆の生活史へ帰着する傾向をもつ。それは、以前からもそうだったが(たとえばエイサ・ブリッグス編の『チャーティスト研究』(一九五九年)、国家ないし国民の歴史よりも、一地域、一地方、一都市、一地区の

歴史に興味を示す。主観のないし主体的経験を重視する。

ホブズボームを転倒させ、労働史においても自然発生的な抵抗運動が重視される。ところで「ウェールズの炭坑夫がラスキン・カレッジの学生に語った——俺たちは何某がコーヒーに砂糖を入れたかどうかには興味なかった。俺たちが関心をもったのは、社会がどのようにして、またなぜ、変わるのかということだった。」ラスキン・カレッジ社会史家グループの代表ラファエル・サミュエルいわく——炭坑夫が興味を抱いたこの種の民衆の歴史は、マルクスの権威だけでなく、スベンサーやコント、はてはダーウィンの生物学的理論まで、自在に借用する傾向をもつ。(Raphael Samuel (ed.), *People's History and Socialist Theory*, London 1981序論参照。)

このように変化の指針が多様である一方で、民衆史の扱う「民衆」の意味も多義的である。国王対コモンズ、金持対貧乏人、教育ある者と単純ないし純朴な人々、さらには搾取との関係で民衆の位相がはかられる。良知君は、これらの既成の民衆概念に含められながら、なおそれからはみ出す民衆にウィーンで逢着した。「よそ者」——ガスト・アルバイターがそれである。そのなかで一番多

いのが南スラヴの出稼労働者だった。

* * *

「歴史なき民」が歴史を担った。それが良知君のみる一八四八年革命のヨーロッパ、とくにウィーンであり、それが『向う岸からの世界史』(一九七八年)の主題である。本書は、エンゲルスの「没落する民族」にたいする偏見と中傷を問題にしたにとどまらず、革命のために血を流したのも、反革命の手先になったのも、その「歴史なき民」、おもに南スラヴ民族だったことを指摘し、ウィーンのプロレタリアートの実体に迫る。「歴史なき民」はまた「下民」でもあった。そこにはクチンスキーの労働者状態論が色濃くにじみ出ている。マルクスをウィーンにはイレリヴァントな予言者として描き出しただけでなく、その「アジア的生産様式」やプロレタリアート概念まで相対化する。ガスト・アルバイターの存在を、新しい社会主義のための「第二の革命」の前触れとみなす。もちろんそれだけでは単絡的であり、彼がいう「アジア的ユートピア」に終わるだろう。しかしそこに、彼が体中で受けとめようとした世界史の方向性の意識が明瞭に読みとれよう。

その後、良知君は急速に社会史に接近する。「思想史を完成するなかで」社会史に迫り、「社会史を自分のものとする過程で逝ってしまった」と阿部謹也氏は、良知君の絶筆となった『青きドナウの乱痴気』を評して述べている。(平凡社『月刊百科』一九八六年三月号)この書物に関するかぎり、私はむしろ、最近手にした水田洋氏の書評(『歴史研究』五五七号、一九八六年八月)の趣旨に賛意を表したい。水田氏のいうように、良知君の「ウィーン子への愛情」、「流民プロレタリアートと市民職人にたいするおもいいれ」、「そういうかげの人びとへの愛情」がこの本の基調のひとつであることは間違いない。つけ加えていえば、それがクチンスキーの労働者階級「状態史」に根ざすことに留意すべきであろう。他方、水田氏は、この本が『向う岸』とあわせて読まれるべきだというが、これにも賛成である。『向う岸』には、歴史の方向性の意識が躍動していた。そこに描かれた大状況は『乱痴気』では影をひそめ、「小状況をえがいたタブロー」のみが集められた。「大状況あるいは価値体系の崩壊が、社会史の流行を生んだから、」そのような社会史として書かれた本書としては当り前のことだろう、

と水田氏はいう。しかしこれは、突如ガンに倒れた著者の、数カ月の余命を注ぎ込んだ口述の書である。時間さえ許せば、大状況をふまえた一八四八年のウィーン革命さらにはヨーロッパ革命の、壮大なドラマを書きあげたことであろう。マルクスを相対化し、世界史を相対化したうえで、なおかつ大塚先生が「労働者の登場と〔俗流〕経済学者の退場」と呼んだ一八四八年革命の方向性(『大塚金之助著作集』岩波書店、第二巻参照)について見過まることはなかったであろう。むしろ良知君の思索のカナメであるウィーンの、ヨーロッパのガスト・アルバイターが、イギリスの「ニグロ」が、あるいは本物のニグロが、あるいはアフリカの人々が、「全地球労働者」が、第二の革命の主役を演じなければならなくなるような大状況が、今日、起きようとしているのではないだろうか。そのためには、資本の連帯に劣らない、東西南北の労働者の連帯が求められるのではないだろうか。社会思想史の再生や、俗流でない経済学の再構築が望まれるのは、まさにそのためであろう。

* * *

数年まえのアメリカ歴史学会の総会で会長演説をした

イエール大学のハヨ・ホルボーン教授は、アメリカにおける思想史研究にふれて、「社会史が思想史の必然的な完成物である」と語った、といわれる。これは、スチュアート・ヒューズのいう思想史の歴史の第四段階、つまりニュー・スクール以後の傾向で、アカデミシヤンのエリート主義にたいする批判、コモン・マン蔑視と思われるものへの抗議に象徴される六〇年代末からのアカデミック・リヴォルューションの成果でもあった。このとき思想史は、歴史の一分野としての自立性を奪われ、カルチュアの歴史として再定義される破目になった、とヒューズはいう。同時に彼は（現在カリフォルニア大サン・ディエゴ校名誉教授）、ここ数年来、彼の大学で思想史をとる学生数の減少したことを嘆く。これは、思想史の出発点である Socialisation of Ideas の Socialisation が、政治の保守化とともに、一方では more domestication、他方では脱社会主義化または less collectivisation を意味するようになったためではないだろうか——これは、私の解釈だが、彼も全く同意見だという。政治と社会の保守化のなかで、社会史が学問の各分野に侵入する社会史帝国主義！を彼はまじめに心配しているようである。

しかし本来、社会史は、思想史の一分野であった。あるいは思想史と一体のものであった。クレイン・ブリントン、ウィリアム・コベットの社会史をそのようなものとして位置付けている。またラファエル・サミュエルがいうように、マルクスの『資本論』は「資本の犠牲者の目で見た資本の発展史」という意味で「下からの民衆史」である。総じて社会史・民衆史のなかには、左派的なもの、右派的なもの、中間的なものが区別されよう。これもサミュエルの受け売りだが、トレヴェリアンの『イギリス社会史』が右派のよい例であり、闘争とは無縁な、理念の欠如した歴史、宗教と倫理的価値とを強く意識した歴史である。社会関係は搾取の関係としてよりも、相互依存の関係として描かれる。基本的には批判的であるより現状肯定的である。民衆を変化の担い手とするときも、変化の方向性や、働きかける対象の性質は明らかにされない。

学問の保守化は、わが国でも、「市民社会」という用語の使用にたいするためらいのなかに、その一例をみることができる。高島善哉先生でさえ、「市民社会」は大塚金之助の造語であって、場合によっては「市民制社会」

におきかえた方がよいかもしれない、といわれる。「市民戦争」も大塚金之助の造語だ、という人が出てくるかもしれない。すでにスペインについて「市民戦争」派と「内戦」派とのあいだに内戦が始まり（戦争をしかけたのは内戦派である）、フランコの場合と同じく、当面はどうやら保守派が優勢なようだ。

議論が横道にそれたが、ラファエルは民衆史とマルクス主義との相互浸透の必要を説く。そうすることによって真にオボジションの歴史、オルタナティブの歴史を作り上げることができる、という。それは、言葉の最もリアルな意味で特殊を一般に、部分を全体に結びつける歴

史であり、それ自体、思想史の再生を促す力となり、新しい価値体系と新しい大状況に思いをはせる歴史になるだろう。良知君は『青きドナウの乱痴気』とともに葬り去られてはならない。彼自身、それを越えようという気迫、それが許されないことにたいする無念さを隠そうとはしなかった。あの穏やかな笑顔のままで。その彼の無念さを受けとめ、彼の仕事を継承し、発展させること、（ちょうど大塚金之助にたいして良知君が行なったように）、それがあとに残された者の課題であろう。

（一九八六年九月二〇日脱稿）

（一橋大学教授）